

## 第二回 加藤周一『羊の歌』読書会（二〇一九年一〇月一九日）

### 第二章 「土の香り」

#### 【本章を読むためのポイント】

- ① 二章でワンセットの構成を意識する。
- ② 記述の精粗を意識し、精しいこと、荒いことそれぞれの意味を考える。
- ③ 「他処者」「みずから択んだ観察者」という生き方の出発点として読む。〔参考資料1〕

#### 【本章の概要】

前章から引き続き、加藤周一の親族についての語りから始まる。父方の伯父を対象に加藤の人物評価の基準が示されるが、本章では親族の描写は抑制して、「田舎への旅」と、そこで「観察者」としての自分を意識したことが主に語られている。

東京から父の生家がある「田舎」へと向かう途上で感じた「日常性からの解放の感覚」、田舎道や祖父の家で遭遇する匂い・音・光などが詳細に描写されるが、それは後年のメキシコ・シティーへの旅の経験と重ね合わされることで、生涯続く旅のはじまりとして位置づけられる。

旅はまた、加藤が自らを共同体にとつての「他処者」「観察者」として意識するようになる契機として描かれる。田舎の子供たちから観察される経験と、大人たちの宴会を観察する経験、こうした二種類の一方通行の関係を描くことで逆に相互の関係の不在を印象付け、田舎において加藤は「他処者」「観察者」である他なかったことが示される。

この経験はまた後年の経験と重ね合わされ、加藤が強制された観察者から自覚的な観察者へと変化していったことや、自覚的な観察者として生きることが「決断を迫る」重大な問題であることが示唆されている。

#### 【本文解釈】

段落（一） 旧一三頁、改一四頁

① 「私は田舎で暮らしたことがない。しかし田舎とのつながりが、全くなかったわけではなく」

ここでの「田舎」は父の生家を指すが、晩年の著作『日本文化における時間と空間』（二〇〇七年）には次のようにある。「私は関東平野のおそらく典型的な農村の一つと一九三〇年代に何度も訪ねたことがある」（一五三頁）。

段落(二) 旧一三頁、改一四〜一五頁

①「父の生家は、関東平野の熊谷に近い村で、徳川時代には帯刀を許された名主の家」  
生家は現在残っていないが、埼玉県北足立郡中丸村（現在の北本市北中丸）にあった（鷲巢力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』（以下『加藤周一』七七頁）。中丸村は人口約四千人（一九二一年末時点）の農村で、加藤家はこの辺りに広大な農地を保有する在村地主であり、その当主である祖父（加藤隆次郎…一八五六〜一九四二）はたびたび北足立郡会議員に選出された地域の有力者であった『北足立郡誌』。なお、祖母は加藤たき（一八六〇〜一九二七）。

②「一九二〇年代には、村の森林と耕地の大部分をもち」

本章のエピソードが一九二〇年代の出来事であるかははっきりしない。

前章に「子供の私の記憶は、関東大震災の前にはさかのほらない」と書いており、本章のエピソードも1920年代後半、特に父方の祖母が亡くなった二七年から一九三〇年代の出来事であると思われる。

「一九二〇年代には」と時期を強調しているのは、戦後の農地改革で耕地の大部分を失ったことを示唆するためか。

③「子供は三人あったが」

長女・新井「加藤」ふじ（一八七九〜一九五七）。息子に新井光彌（一九〇一〜一九六〇）。新井家も加藤家と同じく豪農であった。光彌は「病身」の章に登場。

長男・加藤精一（一八八二〜一九五〇）。東京高等商業学校を卒業。東京・神田在住。

次男・加藤信一（一八八五〜一九七四）。浦和第一尋常中学校から第一高等学校、東京帝国大学医科大学へと進学する。『加藤周一』七五頁

以上の父方の親族のうち、加藤に強い印象を残したのは精一だけであったようだ「参  
考資料2」

この精一については「東京を動かない伯父は、ひとりで、女中をおき、外出もせず、ほとんど人とも交らず、朝からどてらを着て酒を飲んでいた」と通俗道徳からの乖離が強調される。だが、加藤がこの伯父に抱いた印象は好意的なものである。

段落(三) 旧一四〜一五頁、改一五〜一七頁

①「その若い頃、当時珍しかった写真術に凝り」

精一には『近世写真術』（一九〇三年、金沢巖との共著）がある。また、加藤信一（著）・加藤精一（校閲）『写真術階梯』（一九〇四年）もあり、この伯父が加藤の父に与えた影響は大きかった。ちなみに、信一は息子（周一）に対し、医学部ではなく工学部への進学を希望していた（『加藤周一』四八〇頁）。

②「学校を卒業してから死ぬまで四十余年の間、どんな職業にも就かなかった」

精一は地主という階層が生み出した独特の人間であると言えるだろう。「書画にも親しまず、焼物にも凝らず、美食をも追わず、おそらく女房の他には女も知らなかったろうし、またおそらく親しい友人はひとりもいなかったろう」と精一の特徴が列挙されるが、そこでは母方の親族との違いが意識されていたと思われる。「要するに、怠けていても楽に暮らしてゆける人間が、一生怠けていたということであったに違いない」というのも、通俗道徳からすれば好ましくないことに違いないが、そうした生き方がもたらした「一種のあたたかさ」について加藤は好意的に言及する。

③「さればこそ、その人物には卑屈なところがなかったし、出世を望んで出世できなかった大阪商人の息子のように下品なところがなかった」

母方の親族との比較。母方の祖父に対する評価と同じく、本章でもこの伯父に対し、世間の評価と関らず自分の直接的な印象を優先させるという態度をとっている。

④「しかし私がこの伯父と将来無縁ですごすほかならうということだけは、子供心にもはつきりと予感していた」

前章で「他方では女友だちのいるときの祖父を、理解していなかったにしても、理解するかもしれないと予感していたにすぎない」と書いていることに対応している。母方の祖父は女性への感受性の強さという点で、後年の加藤にとって近しさを感じられる存在であった。一方、この伯父に関しては「その役に立たなさ与人柄のいや味のなさとの間におそらくはありえたであろう密接な関係」を理解するにつれ、かえって距離を感じるようになった。

段落(四) 旧一五〜一六頁、改一七〜一八頁

①「その頃の信越本線の汽車は数が少なく、私たちの家のあった渋谷から、一度上野へ出て、熊谷との間を往復するのにも、日帰りでは忙しかった」

上述のとおり、父の生家は埼玉県北足立郡中丸村にあった。上野発の高崎線で行き、北本宿駅（一九二八年）か鴻巣駅（一九二八年）で降りたと考えられる。なぜ「熊谷」を強調するのかについては不明。

実際には最寄り駅から父の生家までの距離は短いのだが、「汽車を降りて、自動車を備い、村まで行き、村のなかをしばらく歩いてから家にたどりつくまでには、かなりの時間がかかった」とあり、時間的な引き伸ばしがなされている。

②「おそらくそのたのしみの性質は、後年の私が、時に太平洋を越え、時にインド洋を越えた旅のたのしみと、あまりちがわなかったかもしれない」

同じ段落の「荒川とその河原は、太平洋よりは狭い。しかし汽車はおそく、私は小さ

かった」に対応。ひとつの日常性を離れ、別の日常性へとたどり着くまでの解放の感覚について、加藤は「鉄橋を渡る車輪の規則的な音」が聞こえ、「河原の広い空と河原との間に、荒川の水が光」り、「すべての日常性からの解放の感覚をよびさました」と書く。五感のなかでも聴覚と視覚が強調されている。

段落(五) 旧一六頁、改一八頁

①「私が今離陸したばかりの旅客機のなかで味う感覚は、小さい私の荒川鉄橋の感覚と少しもちがわない」

「規則的な発動機の音」を聞き、「眼下の街は、涯もなく拡がる雲の海の彼方に、たちまち遠ざかる」のを見、「私はあらゆる社会から切り離された一刻の私自身を味わう」。汽車の描写と同様に、聴覚と視覚が強調される。ひとつの日常性から別の日常性へとたどり着くまでの過程において「私はあらゆる社会から切りはなされた一刻の私自身を味わう」ことは、幼少期から変わらない旅のたのしみである。

しかし、目的地への移動過程の共通性を強調することは、到着後の相違点を強調する前段階としての意味をもつ。

段落(六) 旧一六〇一七頁、改一八〇一九頁

①「税金免除の商品のおかれている空間は、そこに誰も属せず、従って万人がそこに属している空間である。しかしひとつの村は、そこに誰かが決定的に属していて、誰かが決定的に属していないところなのだ」

加藤が得意とする対句表現。空港では、すべての人が旅人であることによって、逆に自分が旅人であることを意識せずに済むが、ひとつの村では、自分だけが旅人であることによって、そのことを意識せざるを得ない場所なのである。それはまた、旅先にいる彼らに対して自分が何者であるのか、そして彼らに対して自分がどのような態度をとるのか、という決断を迫るものであった。

②「その村の道は」

「田や畑の間を縫い」とその土地の空間的な構成の描写から入り、道行の長さを示す。続けて「ひばり」「藪鶯」「案山子につないだ鳴り物」(＝聴覚)、「ぬかるみ」(＝触覚)、「壮大な夏の入道雲」(＝視覚)、「独特の土の香り」(＝嗅覚)と列挙。田舎には都会とは異なる感覚的秩序が存在していることを、味覚以外の五感すべてを列挙することで強調している(『加藤周一』七八〇七九頁)。それは加藤が田舎から受けた印象の強さを強調するとともに、別の感覚的秩序に住む祖父との間に生じる齟齬の伏線となる。

五感のうち、味覚が挙げられないこと、そして「土の香り」(嗅覚)が挙げられることは、前章との対比も意識されているだろう。また、比較的近い時期に書かれた『詩仙堂誌』でも「農家の庭に特有の匂い」が強調されている。[参考資料③]

段落(七) 旧一七〇―一九頁、改一九〇―二二頁

①「村の子供たちは、私たちをみるために、またみるためにのみ、そこにいたのである。私を「東京の人」にしたのは、彼らの視線だ」

村の子供たちは加藤を「東京の人」として見、加藤自身もそれを感じ取っていた。また、視線は一方通行であり、相互的な関係は成り立っていないかった。だから私が彼らを観察するのではなく、彼らが私を観察していたのだ。私は彼等の世界の一部分にすぎなかったけれども、彼らをその一部とみなすことのできるような世界を、私はもっていないかった。「こうした相互的な関係を持たない「他処者」であることは、同時に一方的に見る「観察者」の条件ともなる。

②「心中ひそかに、自分が彼らの一人であつたらと、願わずにはいられなかったが、また同時に、その願いが到底不可能なものだということも、はっきり意識せざるを得なかった」

この段階において加藤が、「強いられた他処者」であつたことを示唆。長屋の住人を無意識のうちに見て見ぬふりしていたように、意識的な選択ではなかったということを示している。

段落(八) 旧一九頁、改二二―二三頁

①「その頃の私は、村の子供たちの側にも、「東京の人」になりたいという願いがあざざるといふことを、想像することはできなかった」

後知恵と断つたうえで、当時の子供たちがどのような気持ちを抱いていたのかが記されている。加藤がこうした認識を獲得するのは、その後毎年夏に滞在する追分での生活を通してか、あるいは戦時中の上田での疎開生活を通してのことであろう。こうした東京と田舎の複雑な関係が加藤にとって大きな関心事であつたことは、晩年の『隅外・茂吉・李太郎』といった著作にもうかがうことができる。

段落(九) 旧一九〇―二〇頁、改二三―二三頁

①「村のなかでいちばん高い杉の森を背にした祖父の家は、二階建ての母屋を中心として、広い敷地の周囲を、高く築いた土塀でかこんでいた」

農具や家畜を飼う小屋のほかに、おそらくは小作米を収めたであろう白壁の蔵がある。母屋の二階で養蚕を行うというのも、戦前においては地主に限らず広く見られた(戦後には化学繊維の普及により消滅)。

父の生家に向かう道筋と同様に、家の内部に關しても味覚を除く五感をもとにした記述がなされている。「蚕の桑の葉を食う音」(「聴覚」)、「燭台をもって、風に吹き消されないように片手をかざし」(「触覚」)、「暗がりのなかで蠟燭の火影が壁に揺れる」(「視覚」)、「燃え残りの薪の匂いと、風呂桶の杉の香り」(「嗅覚」)。

段落(一〇) 旧二〇〜二二頁、改三三頁

①「小さな私は、暗がりをおそれていなかったわけではない。しかしそれは、風呂場や便所へひとりで行くことを、ためらわせるほどのものではなかった」

暗さを加藤は恐れなかった。「よくひとりでゆけるねえ」と、蠟燭をもって便所に起つ私に、祖母はいったものである。「お化けのでそうな気がしないのかねえ」という祖母の反応には期待外れ(子供らしくない)というニュアンスが感じられる。

②「しかし、私は、「お化け」というものがほんとうにあるだろう、とは信じていなかった。みたことのない「お化け」が実在しないという私のうけていた教育は、それが実在するかもしれないという話よりも、たしかに説得的であった。「中略」今でも私は怪力乱神を語ることを好まない」

父・信一からの教育のためか。お化けが存在しないと考える自分が「生意氣」に見えることを祖母の反応から感じ取り、それによって加藤は自分が田舎とは別の感覚的秩序に在ることをますます強く意識しただろう。

段落(一一) 旧二二〜二三頁、改三三〜三四頁

①「私は「お化け」を怖れてはいなかったが、生きた鶏を締め殺す作業は、怖しくて到底みていることができなかった」

田舎の感覚的秩序は加藤にとって喜ばしいものだけを与えたわけではなく、ひどく怖いものも与えた。「生きた鶏を締め殺」し、首の腱を引つ張れば頭が動く仕組みを作った祖父は「全くちがう感受性の世界に住んでいた」。

②「祖父のやってみせることを熱心に見まもっていたのは、それが面白かったわけではなく、死んだ動物の頭が動くということに抑え難い好奇心を刺激されたからである」

加藤が「観察者」として生きて行くうえで、なぜそれを観察するのか、なぜ自分とは直接のかかわりのない問題について知ろうとするのか、という問いを避けることはできない。ここではそれに対する答えの萌芽らしきものが書かれている。「参考資料1」

③「私はまた、そういう老人に対して、礼節のかげにかくれてみずからを守る術を、知らなかった。途方にくれた子供は、泣き出すほかない」

好奇心の強さゆえに、見たくないもの、不快なものですら見てしまう。母方の祖父の家では祖父の持ち物である長屋の住民を「見て見ぬふり」したが、このときの加藤はそれができず、葛藤に堪えかねて泣き出してしまい、母の愛に救われる。

段落(一二) 旧二三頁、改三四〜三五頁

①「静かなその座敷のまえには、泉水と植込みの庭がつくられ、出入りの多い母屋のまえの中庭からも隔てられていた。新しい畳の匂うその座敷では、夏の午後の蟬時雨が降るようだった。」

母屋と渡り廊下で繋がる「新座敷」についての描写は、「新しい畳の匂う」（＝嗅覚）そして「静かな」、しかし「夏の午後の蝉時雨が降るよう」（＝聴覚）場所。匂いと音によって特徴付けられている。

②「わざわざ田舎まで出かけていっても、杉の林のなかで草を探したり、竹藪で竹ノ子を掘りおこしたり、畦道で蛙を捉えたりするよりも、はるかにおもしろい世界を私は本のなかに見出そうとしていたのである」

ここで列挙されているのは、田舎の子供が普通に行うことであろう。小学校にあがった加藤はメニコ遊びに興味が持てず（「桜横丁」）、町の子供とも交われなかったが、畦道で蛙を捕まえられないのでは田舎の子供とも交われない。結局田舎でも加藤は他処者である他ない。

段落（二三）旧二二～二四頁、改二五～二七頁

①「冠婚葬祭は、この田舎の家にもあり、殊に祖母が亡くなった後には、その何回忌の法事というものがあつた。そういう機会には、母屋も、「新座敷」も、全くみず知らずの人々でいっぱいになる」

加藤はこのとき一〇代前半。子供にとって法事は退屈であり、「他処者」「観察者」であることを強いられる。宴会では加藤家の親戚や「陽やけした顔の、手足の指の太い男たち」つまり小作人たちが、法事のあとに振り舞われる料理や酒を楽しんでいる。宴会において「喪服の女たちに酌をさせて」と性別役割分担は明確であり、「坊主なり神主なりのそこで演じる役割は、無視できるほど小さかつた」。男たちも地主からの振る舞い酒であることをわきまえ羽目を外さない（宴会＝祝祭と日常的関係は地続きである）。こうしたことから、その宴会は地主を頂点とする現在の共同体の関係を円滑にすることが目的であることを的確に観察する。

②「ピーター・ブリュッゲルが描いた『農夫の結婚式』」

オランダの画家ブリュッゲルの代表作のひとつ（一五六八年頃）。農村の冠婚葬祭であり、それでいて宗教的要素が無視できるほど小さい点は加藤家の宴会と同じであるが、ブリュッゲルは画面のなかに楽器を鳴らす男や小さな子供の姿、そして男女入り乱れて飲み食いをする姿を描いており、羽目を外さず、子供の役割がなく、男女の役割分担が明快な加藤家の宴会とは対照的である。「参考資料4」

段落（二四）旧二四頁、改二七頁

①「私はといえば、法事にしても結婚式にしても、そのような宴会を全く自分とは関係のないものとして、片隅から眺めていた。〔中略〕宴会の間、子供にかまう者は、誰もいなかったから、そのときほど観察の対象が、私にとって無意味にみえたこともない」

宴会の目的が共同体の関係の円滑化にあるのだから、共同体の余所者にとって宴会が無意味であるのは当然であろう。しかし、無意味に見えるからといって、観察の内容が間違っているということにはならない。冠婚葬祭の正確な描写は、共同体にとって自分が他処者であり、それが無意味に見えることと無関係ではない。「参考資料1」

②「しかし私と田舎との関係が、一方では村の子供たちから見られる関係、他方では宴会の男女を見る関係からはじまった、というのは、注意しておく必要があるかもしれない。相手に見られながら相手を見るという相互的な関係は、はじめからなかった」

「他処者」の定義がここで述べられている。「見る」ということは相手への働きかけも含意しており、相手に働きかけた際の反応を知ることが出来ないという点では、「他処者」には知識の限界も存在する(『著作集』一〇巻「あとがき」)。しかし多くの場合、「他処者」であることは観察者にとって有利に働く。

③「私は他処者であり、おそろしくいつまでも、他処者として生きるだろう。それは必ずしも田舎との関係が、私にとって薄かったということではない」

この表現を裏返せば、どれだけ自分との関係が濃い問題であっても、それに対し他処者・観察者たり得るのだということになる。

段落(一五) 旧二四〜二六頁、二七〜二九頁

①「私はあるとき、メキシコ・シテイーのある知人のそのまた知人の家で、かの国の人々がフイエスタと呼ぶ宴会にまきこまれたことがある」

一九六二年頃のことだと思われる(『羊の歌』その後)『日本文化における時間と空間』。参加者が「自分たちが興奮していることに興奮していた」というのは相互作用の極限を表現するものであり、「他処者」として「観察」するのとは真逆。

②「すると突然、なんの動機も、格別の理由もなく、私にとって、そういうことのすべてが全く無意味だという妙に鮮やかな、否定することのできない考えが、浮かんだ。「中略」かすかに葉なの香りのする夜の風が、酒にほてった頬に快かった。それは私の田舎の、あの独特の匂いをこそ含んでいなかったが、何十年もまえに、父の生家の庭で宴会の夜に子供の私を感じた夜気のみえびえした肌触りを、そのまま思い出させた」

このとき加藤は「すべての宴会なるものに対して私自身がいつも他処者であるほかないのではなからうか」と気づくのだが、そのときメキシコで感じた「花の香り」が、宴会の席で感じた「夜気のみえびえとした肌触り」と重ね合わされている。象徴的な書き方をおして、余所者であることを自覚させられた二つの宴会のあいだにある数十年をずっと「余所者」ないし「観察者」として生きてきたこと、そしてこれからもそう生きるのだということが示されている。



③「その考えは、後悔でも、口惜しさでも、悲しみでもなかったが、一種の決断を迫るものにはちがいがなかった」

「すべての宴会」に対して他処者であるとは、すべての共同体に対する他処者ということであり、相当の覚悟を要する。ここで加藤は、他処者であることの苦しさを覚悟したうえで、そのような選択をとることを「決断」するのであるが、それは同時に、もはや田舎での強いられた他処者ではなく、長い年月をかけて自覚的な他処者へと発展していったことを示唆している。

高みの見物について

(初出 1937年)

好奇心のつよいのは私の欠点である。なにか眼のまえに新しいものが出てくると、それが私にとっておもしろくないことは殆どない。相手がどういいうしかけでうごいてるか知りたくなり、そのために時間を費してしまふ。現に私は西洋見物の旅に出かけ、二年の歳月を空費し、それでもまだ見切りをつけることができない。

ハムレット——ところで本当の話、君はなぜウィットンヘルクから帰ってきたのだ？

ホレイショ——生業怠け者の性質なので。まずそんなところだろう。私は留学ということばかりがきらいだ。少し話がうますぎる。純粹の技術ならば学ぼうと思えば学べるが、それ以上の何を外国旅行から学べるだろうか。

高みの見物ということは、ある社会のなかへ入らない。私が日本でくらしさえすれば、そうなるのはかきらないし、現にそうはならなかったが、私が日本にくらしていれば少くともそうなり得る。高みの見物を免れ得る可能性があるのだ。

しかし高みの見物を免れる必要があるのか。あると私は思う。しかしそれは免れさえすればよい悪乃至誤りといったものではなく、道真に使って便利な知識をあたえ、時と場合によっては便利どころでなく死命を削する知識をあたえるものだと思う。なぜならある一つの社会の全体としてのうごきを客観的に判断するためには、その社会をはなれてみる必要があるからだ。客観的に、つまり公平無私に、責任をとらずにということになる。

高みの見物について

たとえば私はフランスの社会をみて、そのなかでこたごた議論しているフランス人の大部分よりも、こたごた議論されている事柄の結着を早く正確にみとおせるように思う。たとえばいくさの結着、先の見透しというようなことだ。しかしかりに私の見透しが正確であるとして、私の見透しがフランスの社会にとっては何の役にたたないということも考える。またただ役にたたないばかりでなく、私の見透しの正確さは、私の見透しの役にたたないということ、そのことを前提としてなりたっていると考える。一般化して

いえば、高みの見物は正確な判断をあたえるが、その判断

てゆかずに、外から大勢をみわたして眺めることをいうのだろう。社会のなかへ入れば、多かれ少かれ一種の責任をもつことになる。またその社会のなかでの一つの立場をとることができる。高みの見物にはそれが無い。無責任であり、特定の立場によらず、すべての立場に対し公平な態度をとることができる。西洋見物は必然的に高みの見物にならざるをえない。大へんおもしろいが、私はおもしろいことに満足するだけで、その上何かを学んでいるとまで主張する勇氣はないのだ。

しかし西洋見物が、西洋の社会に対して高みの見物であるだけならば、要するにそれは私の好奇心と、怠け者の性質の問題にすぎない。ところが日本の社会に対しても高みの見物だということになると、生業の性質でこまかすわけにはゆかなくなるだろう。なぜなら私は日本人だからだ。問題はそこから出てくる。

私は日本を遠くからみる。私は日本をみているが、日本は私をみていない。そのかぎりでは、つまり私の日本をみるみ方が高みの見物に傾くという点では、私が西洋の社会をみるのに、西洋の社会は私をみていないのと全く同じことになる。私が社会をみ、社会が私をみるという場合は、つまり私の社会をみるみ方が高みの見物でなくなる場合は、私が日本でくらし、日本の社会をみる場合にしか考えら

は役にたたぬ。たまたま役にたたぬのではなく、役にたたぬことそのものが、判断の正確さの条件になっている。つまり事の本質上無益で正確な判断が高みの見物の結果だということになる。従つても私と社会との関係が、本来「解釈することが目的でなく、改造することが目的だ」という原則にたっているとするれば、高みの見物ではこまる。たとえばある場合には正確さをいくらか犠牲にしても、有益な判断、役にたつ判断を必要とするということになるだろう。

私はこういう考えを西洋見物の途中で思いついたわけではない。私は旅行に出かけるまえに、いくさが終つてから私の喋りたり書いたりしたことを想出し、そこにかなり重大なまちがいがあつたことをみつけ、日本でおよそこういう考えに到達してゐたのだ。重大なまちがいは何か。それはいくさの最中の私の態度乃至判断そのものではなく、いくさの最中の私の態度乃至判断にいくさが終つてから私に加えた解釈に係る。解釈の対象になつた事実ではなく、解釈のし方がまちがつてゐた。まちがいでないかつたにしても、少くとも極端に一面的であつた。極端に一面的な考えを出すということそのことは、既に一種のまちがいであらう。

いくさの間私は学生だつた。学校を出ても、学生に似た



『著作集』13頁

は、市中の名刺で人のよく知るところには近づかない。観光乗合自動車の巻きあげる砂塵取まらず、一台去ってまた一台が到る、天日ために暗く、埃のなかに見覚えのある屋根の反りの隠顕するのを遠く眺めて、私は見物をあきらめるのである。

「詩仙堂？ お客さん、どこから来なはったの？」と娘はいった。

修學院で道を訊ねた娘は、詩仙堂を知らないらしくかった。しかし私はまえにもここへ来たことがある。道は、歩むにつれて、おのずから想い出すだろう。詩仙堂へ近づくと、樹立の間の道は、俄かに急な坂となる。上衣を脱げば、汗ばんだ肌に冷気が快い。その坂道の白い土の色、杉の林のなかまで漂って来る農家の庭に特有の匂い……これが私の長く忘れていた世界の感触である。詩仙堂のめだたぬ門は、そこにひっそりと立っている。

庭は果してしずかであった。

門を入ると踏石を伝って、すぐ玄關になる。建物は質素で、格別の工夫もない。比較的広い居間の正面と右手は、庭に向ってひらき、左手には書齋と茶室と庖厨が連る。書齋には隸書で聞えた主人公の漢晋唐宋の名家の詩を写した書がある。すなわち詩仙堂の名のある所以である。庭へはどこからでも降りることが出来る。一周するのにおそらく十分もかからない小さな庭だが、そこには岩に湧く清水があり、小径の思わぬ屈曲があり、俄かにあらわれる石組があり、密になり疎になり、また密になって谷間につづく林がある。これだけの変化と道具立てが、大きくない庭に備わっていて、しかもその印象の狭くくしくないのは、尋常の工夫ではないだろう。そこに十境・

十二景がつくられているというようなことは、私にはどうでもよい。名所に関心のないことは、先にいった。しかしいくら関心がなくても、たとえば桂離宮の天の橋立は、それをそれとして認めずに通りすぎることはできないものである。詩仙堂の庭の十境・十二景は、そういうものがあるとして、知らないままでも通ることのできるものである。桂離宮でさえ眼ざわりになる因縁を、広くないところに繰り返して、庭を狭くする料簡が、この庭の作者にはなかったとみえる。いや、この庭はある意味で広い。谷のしげみは、そのまま東山の斜面を蔽う林に連る。これはいわゆる借景の工夫ではない。庭の外の景色をみせるのではなく、ただ庭の境を限らないのである。春の空は頭上に大きく開いていて、陽光の惜しみなく降りそそぐ庭は、東山の斜面に、たまたま見つけた恰好の陽だまりであるかのようにみえる。二人の男の学生と女学生らしい一人の娘が、その光のなかをゆっくりと歩いていった。谷川の方からは、時々鶯の声も聞える。

廃院無人春昼永

私はこの庭の主人公の一句を想い出した。

主人公は石川丈山である。人見竹洞の編んだ年譜によれば、丈山が官を辞して、ここに移り住んだのは、一六四〇年、その五八歳のときであった。その後三十余年、九〇歳で生を卒るまで、門を柱して客を謝し、「夕ニ洛陽之晚烟ヲ眺」めながら、遂に再び鴨川を渡ることがなかった。「其



## 資料4

42 ブリュエール／農民の婚宴 1568年頃 板 油彩 114×163 cm ウィーン 美術史美術館蔵  
Pieter Bruegel the Elder／THE PEASANT WEDDING Kunsthistorisches Museum, Wien